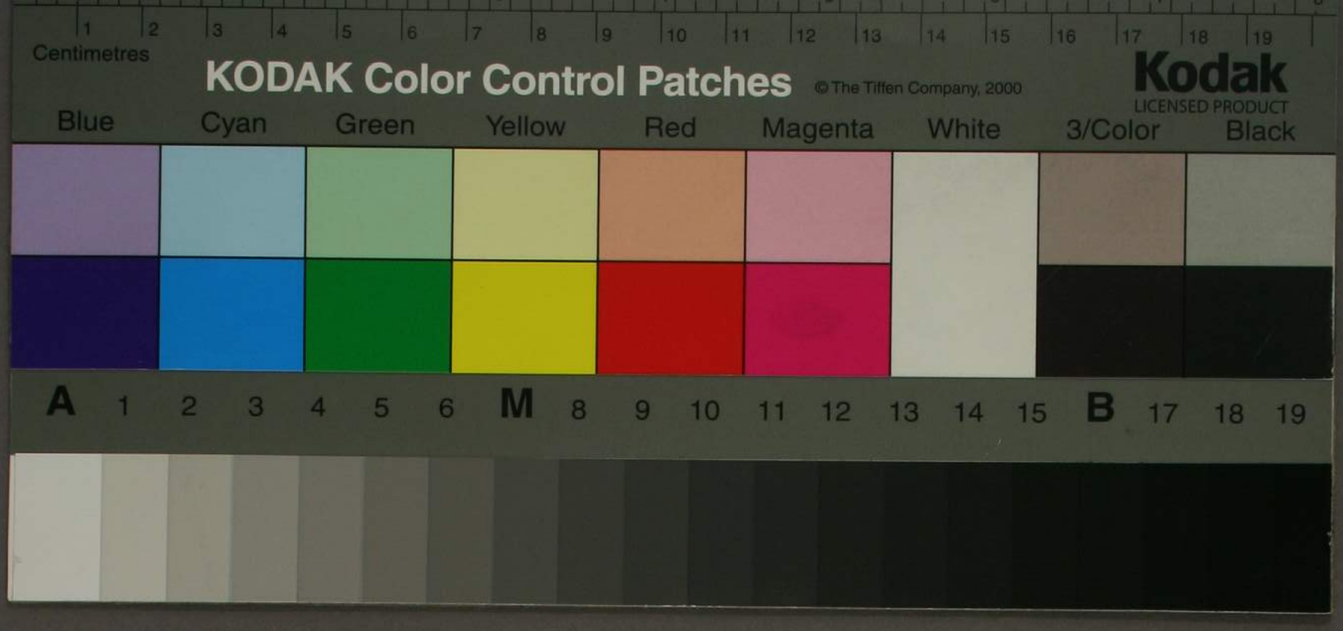
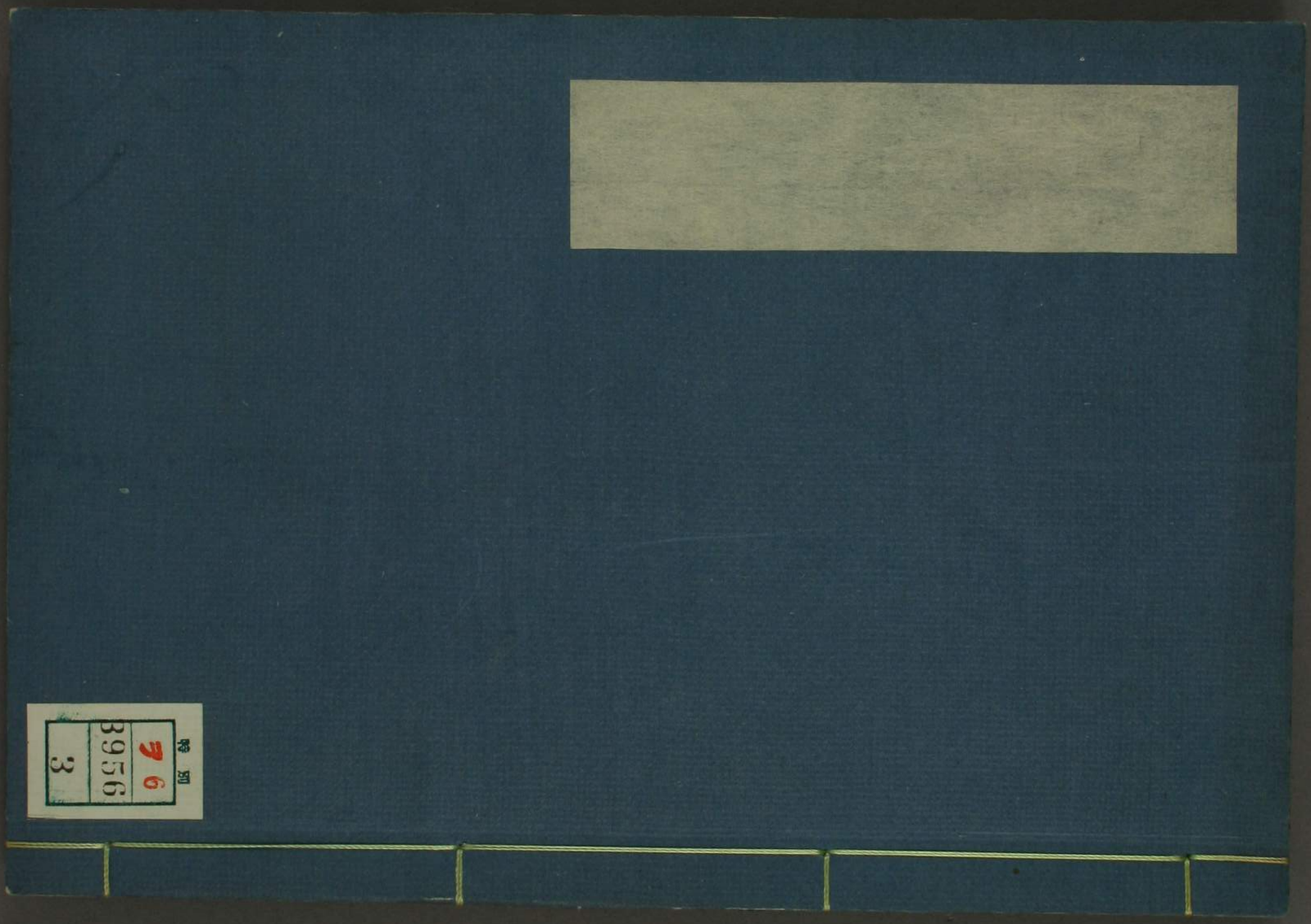

Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A
M
B


図版
76
B956
3

穴一つで男と女を捕へた話 | 毛頭斬れた[redacted]　南方熊楠

此様な題號を掲ぐると怪[redacted]早い讀者[redacted]の中には古い情歌に

「夏女立たし○○したし、心二つに○一つと省る、多分其様

な事を書て此寒天に又れ大阪三界れ喚起と成りはせぬ

かと題夏服から心配下さる方々多からう、箇様の心配[redacted]家

に對して熊楠は大に其厚意を謝すると同時に桃井家の

老臣加古川本藏然として御無用と呼う、何故とならば本

[redacted]は一八九八年露動氏佐學會発行ヒンヂット氏のフ井

諸民族[redacted]オート[redacted]佛領公果國傳篇から譯出した亞非利加土

人間に行はるゝ昔話で、題號の穴は穴ぞが風紀とか偏理

特
門 ラ6
読 3956
巻 3

とかに何の関係無く全く蘭氏が獣を捕る陷し穴で、軍の陷穴え男と女が落た斗りで中で何にもするのでないからだ。

昔し或市に兄弟二人有て弟が不断自分が兄よりも智慧有りと主張するので毎も不和だった、遂に此様な所に居耐られ無いとて弟夫婦と倶に土地を離れ何処とも知らず深遊ひ行き森林を潜り歩く内水最浄き小川側に着くと川の彼方に奇麗が無い、因て暫く休んで水を飲み川に沿て下ると奇麗が有たので川を渡って行くと人聲がする、心も知れず所え行て何様助力を乞知れから引返さうと妻は言ふ、夫は折角来んだからと強て妻を引立て聲のする方え行て見ると小屋が二つ三つ有る、其に唯夫婦二人住て居て今来た夫婦に此処え来た子細を尋ね聞きるり其は奈毒だからと云て一つの小屋を譲り棲しめた、四日間従食で過しんが五日目に家主が言ふには斯して居ても詰らぬ、両夫婦で仕事へ掛らうとて相應の場處え伴行き鋤も穴を掘り柴や落葉で蓋ふて立派な穴を作った、扨家主が[illegible]様獣が穴に陥ぬ先に喧嘩の起らぬ様約束を定め置う獣が陷たら鋤は抑と牝を欲いか牡を欲いかと問ふと弟牡を欲いと答へた、其なら己は牝を自分の物にせう

と家主が定た各々に還って熟睡し翌旦従て見ると窪に
牡牛が落入て居たので弟の所者と成る、明日往て見ると
牡羚羊迄日は牡の子ムビムビ獣次日は牡豕と弟の運の
吉と云物は毎日毎旦引續いて牡獣斗り窪に陥り居さの
で遂には何様して往か分らぬ程澤山食料を獲たが、此弟
無類の恩不知で少しも家主に分與らず自分の妻を森中
に遣はし米を聚めて肉を燻べしめて悉く貯蔵し置た或
日例の如く妻を森中に遣はすと日が暮て還らぬ、弟大
きに心配し家主に告て一緒に往て呉れと乞ふと
家は色衰故明日往うと云ふ、終夜獨で呼歩いても妻らし

い者は見えず外骨程剛強で無から中々以て手筋所ろの
沖落も出ぬこそ、大騒りで還り来て家主を起し何卒貸ま
に往て呉と望むと、家主言ふには昨夜夢に吉々の運が從
前と全く變って今朝から牡斗り往窪に落る筈と見た因
て先づ窪を見に往う、伴て彼處え往と牝も牝も彼
弟の妻が居て居た大喜びで弟に入て妻を援出さう
とすると、待た待た約定通りに此牝は家主の物だ、爾は是迄
面旦牡獣を復續け下ら一足も出ぬ、然に此初物の牝
迄取て仕舞ては約定が何の役に立つかと一本参られた、
弟大きに僕が悪かった、貯置た肉を皆迄るから宥して呉

れ、其に僕の妻は獣で無い人間だ人間を殺して食さ物で無いと言ふと家主だつて約束は約束だ儞の妻も此に相違無い、既に穿に入た以上は元の物と定つて居る元の物なら食らと食まいと己の勝手だ、此様尤物が穿に隠て御用に立うと言のは穴賢と言物だと主張のて弟何も詐術を失ひ終日妻を戻せ戻さぬと爭ひ居た勢き庭に此弟の兄狩に出て此穿に遠からぬ森中に来ると大聲で穴穴穴穴と穴の事斗り爭ふ声が聞える、希代に思ふて潜迫き見ると弟だつた、弟兄様好處れ来て呉れと牧んだが兄は一向相手に成ぬ様子、家主は御前様が此者の兄か

飛た不解漢を弟に持れた御察し申すと挨拶して紛議の顛末を語ると、兄其は家主様が尤もだ弟の妻は無論家主様の物で弟うろ間違ひ、鴻恩を忘れて一疋の獣すら追なんぞが重々悪い、懲しめの為め眼前穿に入て彼妻を殺して遣なさいと勧たので家主[illegible]支えて弟を衝退け穿に飛入た其時猫と家主の跳入るのを止めんと急る弟をハツタと睨んで兄言て様馬鹿者奴是でも儞は生平通り自分を此兄より智慧が多いと謂り得るか、今家主が穿に自ら陥つた家主は牡だから約定通り家主の命は儞の所有だ、家主の命を縦して自分の妻を放し貰はぬか其處

で家主兄の寺計に中られたと云り仕方が無いから穿中の婦を扶けて其夫に復し兄と弟夫婦三人伴て目出度く故郷へ帰つた、是が穴一つで男と女を捕えた話。

と言ふと苦し川村隨見の智慧と言て隨見口を開くと人々又何か格別な名言を吐く事かと注意したと聞くが南方先生も其通りで何か教訓らしい事を述るかと思ふ眼を張り息を凝し居た讀者が是は全然河童に尾抜れた様な短話で無闇に穴穴と穴呼りをしながら穴中で何たる狂言も無く穴から出て三人伴帰つたでは尾を撤て尾を有めた様な落語に過ぬ、親切り話の種が盡たのでがた有

う杯と呟くなろう、南方先生と呼れて欲を食ふ者が神通力で其程の事を知さらぬやは全くは末世の衆生に佛法の有難さを教え遣る手解きに

佛教のコンスタンチン帝と呼るゝ迦正法を弘隆し廣く佛会利を布て八萬四千の法王塔を造つた阿育大王の傳を述んと企てたが、其傳中に上述穴一つで男と女を捕えた亞非利加黄金の話に似た所が有るから眠気覚しに類話として先づ擧た人で是から難有いのだ、

釋迦如来が王舎城に入て七食しむふと童子二人沙遊して居た、其一人闍耶童子が佛に麥麨を奉ふと念じて

細き沙を佛の鉢中に入れ、扨合掌隨喜して發願し此善功德を以て一天下の繼蓋王たらしめよと言へば、此功德で佛滅して百年目に彼小忰が巴連邑の王家に生れ後に阿育王と成れば、巴連邑王頻頭婆羅子有り修師摩と名く、時に膽婆國の婆羅門に一人の女有り素敵無類の美人也、相師見て此女必ず王妃と成り一天下を領すべき子を生べしと言へば、父婆羅門大に喜んで此女を莊嚴して頻頭婆羅王に奉つると前夫人及び諸婢女嫉妬の餘り此女に刹毛師業を習はせた、此は賤業だから何に美人だつても王の身に接る事が成ぬ、所が此女刹毛中々上手で王の毛を剃さ問

王が安眠し剃單ふと覺たんで王大喜びで汝は何を望かと問へば王と共に娛み度と言た、王者は利利姓の灌頂王で汝は下姓の刹毛師だ、印度の法として上姓の男女が卑姓の男女と相愛すさを得ぬと言へば刹毛女我は下姓生に非ず高き婆羅門姓の女で相師此女必ず王妃たらんと父に勸めたから來ました、と答ふ、王誰か汝に此下劣の業を習はしめたかと問へば舊夫人婢女がしたと答ふ、王其は怪からぬと言て件の女を第一夫人とし二人迄男子を生ば兄の方が阿育で無憂と云ふ意味だ生まれ時三極安産だつたから此名を付た、然るに前生に佛に沙を施した因緣

で阿育の軀が麁鹿かつた故文王諸王
子を全の御殿に集め相師して誰王子が父の後を嗣べき
かを相しめた、阿育父が己を好め
無く従ずに居ると母が薦りに勧めるので不承々ら従く
途中成護と云大臣に逢て一番老た豪を貰ひ騎て従た、他
の王子輩殿中に竝り金銀の器に山海の珍饌を盛て居る
阿育は見淋く地上に竝り瓦器に飯と酪を盛て辨當居
た、其時相師通く諸王子を相ると阿育一人が王位を嗣べ
き者と判つたが文王の好ぬ子だから言は必ず殺さゝ
は必疑だ、困て狂に陥す策誰と名を指て咎しては不敬だ

から唯此内で何な風の王子が王位を嗣ぐと云事を申上
う先づ一番好い畜に騎た人が後日王と成る筈と云と諸
王子各者こそ一番好畜に騎た人が後来の王と成る、又一番好い飲食
番膳竝庭に竝つた人が王たるべしと言た、諸王子孰れも其は己
を好畜で食ふ人が王たるべしと言た、諸王子孰れも其は己
だろう己だろうと己惚居る問に阿育思惟して吾は一番
先た家に乗て来た是程好い無物は無い、土は萬物の母だ
吾れ大地に竝り土で作つた器で人間一日も欠可らざる
飯と酪を食たから是程揃って好い事は又と無い、父王火
だろ吾必ず王と成に定つたと明察した、王宮に還つて後

母が相師に抑も多くの王子の内で誰が王位を継かと問と阿育だと答へたので重く禮物を遣て後た王に問れて王は返答に困り殺さぬも知ぬ迚他國え逃退せた、希臘の昔しリカオンてふ大馬鹿者神の智慧を試すとて小兒を殺し其腸を（大神ゼウスに食せた、大神大に怒てリカオン父子を悉く狼に化し希臘中の人間を絶す積りで大水を出し人皆流死だがプチアヒテウカリオンと其妃ピラ二人のみ神告に因て難を免れ水退て後ゼウスの第二后テミスの廟に詣て人類を再興せんと祈ると女神教えて二人の頭を覆し廟から歩出る時後方え二人の母の骨を投よと言た左思右考の末母の骨とは地の骨即ち石だろうと勘育き夫婦石を集めて後え投て歩くと夫が投た石が男共妻が投た石が女共が生じたと（有て其男女共が何をしたか書て居無いが其から人間殖く繁殖したと有る、去ば阿育もデウカリオン同様の考えで地は萬物の母だ自分共其萬物の母たる地上に立つたから金殿上に立つた諸王子よりも吉相だと考えたは尤も左事だ、亡に不二新聞社事も前日門人をして覗かしめしに梅田に在た時は九で土間だつたが北濱え移てから疊を敷たらしい甚だ了簡が間違て居るから早速元の土間に復り

畳を畳て酒肴にして贈って呉れると益繁盛する理屈だ

扨頻頭羅王の屬國徳叉尸羅が反いたので王其子阿育に往て伐しめよう一切武器を與へ、家来共此では戦争に往き得ぬと呆れ居る、阿育言く我若し王たるべき吾根栗報有ば兵器自然に来るべしと云と同時に地が開いて多くの武器を出した、即ち往て伐つと敵戦はずに降り遠近皆降伏するので天下を平ぐて海際に至った、時に阿育の異母兄で王の長子たる修私摩苑より城に還入ると成護大臣が城から出ると行違た、此大臣は宮武氏の前身で頂上無髮剃り現事に光るのを怪た、大臣大に憤り今され此通りなら王と成たら必ず我を殺すべしとて王臣五百人と謀て阿育を立うとした、此時徳叉尸羅の武復叛いたので王今度は修私摩をして往伐しめ阿育は本國れ還ると丁度王重病で死せんとす、勅して修私摩を召還して王位を譲り阿育をして代て征伐に往しめよと云ふ、諸臣詐て薬汁もて阿育の身に塗り阿育は病棄だから軍に往得ぬと偽す、扨王の臨終迫く成て阿育を王の前れ伸出で當今王位を阿育に譲り修私摩還た上阿育より王位を傳ふべしと勧めると王大に怒って承引せず、時に阿育者若し如法た王を得ば天即時我に天冠を

奥ふべしと言ふと諸天忽ち天冠を其頭に載たので王信
す走り熱血を吐て死だ阿育王位に登り成護を第一大臣
とす修私摩兵を率て来り攻ると成護大臣方便して城門
に阿育及諸軍士の木像を立て地に坑を掘り無烟火を充
て物もて覆し置く修私摩木像を見て當の敵と謂ひ前人
で坑に堕て焼死だ諸臣既に阿育を王とし擁立の功を恃
んで君臣の禮無し王諸臣に諸こらく沙等茎果之樹を伐
て刺棘を植べし諸臣命を奉せず刺棘樹を伐て茎果之樹
を植べきだ未だ嘗て茎果を却除て刺樹を植こを聞ずと
吐す再三勅すれども従はぬ故王怒て刺劍もて五百大臣を
殺した又或時阿育王諸宮女を將て華園に遊ぶと無憂樹
が一本甚奇麗に咲れ居た無憂樹は槐皂炎杯と同じく
豆類の樹で三四月溢開し花が濃紅に変る其間種々の異
彩が有るので花中の最美なる者としヴァ神廟近く神木
として植え美人の足に觸ると花咲くと信ぜらる惡鬼王
ラヴァナが印度一の美后シタを奪ふて無憂樹園に囲ひ
置たと有て見れば憂を忘さいと云ふ程の美花だ養生の
為灸据て居る美女の像に題した「艶い目をしたのもした
で無駄に成り」てふ川柳が有るが変に云ふシタは美后の
名に決もて何にもシタんで無いから風俗壊乱杯と疑は

れぬ様辯じ置く、阿育王自分と同名の無憂樹の滿開せるを見て大機嫌で居た其に引猶ほ宮女華王の形醜く皮膚甚澁るを以て王を愛せず王に死ぬて無憂樹を毀折た、王眠より覺て此狼藉を見怒て諸宮女を竹筒に裹で燒殺した、是より王殺人を好き暴虐甚しいので國民が王を旃陀乃ち屠者王と呼ぶ、見る人見兼て成護大臣王自ら人を殺す丈は止て殺すべき者有ば屠殺人に命せと云た王最も世と勅して屠殺の名人を求むると耆梨山に住む獵師に耆梨と名くる子有り、大惡の性で好んで小男小女を縛り又水巷の生物を捕殺し父母を困らす事比類無し

世人之を旃陀耆梨子と呼だ、王大に悅んで彼に使して沙能く王の為に惡人共を斬り殺さんやと問ふと、世界中の罪人を悉く殺す淨除人況て此一地方の奴輩をやと答へた、因て彼を將來らしむる使に向ひ父母に告別すべき間候て呉れと頼んで父母に事情を告ると父母三度迄子を諫め乍行くなと言ふ、耆梨子大に怒て父母を殺し王所に至り王に乞て極て嚴な舍を作り唯一つ極て精嚴な門を開此舍中に入た者は出る事が成ぬと定め扨寺に往て語僧が經を講ずるを聽くと熱鐵丸を呑せたり融銅汁を灌いだり、火車鑊煮刀山劍樹種々雜多の地獄が有る、耆梨子

妻細記れ歸り件の舍中に經說廻りの人造地獄を設け經說廻りに法律を棄べて罪人を責た、是より前舍衛國の商人妻と俱に航海貿易に出で海上で兒を生だので海と名け、十二年間海上を往復する内辯姙其父母を殺し子斗り免れ世を果敢んで佛法に歸し出家遊行して巴達邑に著た、晨早く起て托鉢し行くと莊嚴極まる門を見食を乞んと入て見れば人造地獄だ、驚て出ようとすると耆梨之を執え一度入た者は出ることを得ぬと云ふ、海比丘泣出すを見て何故小兒のかく啼くぞと問ふ、比丘答て我死を畏れず解脫を求んを忘れ求る所未だ得ず故に啼ぐや、人身(逐)

て得難し出家亦然り、偶ま人間と生れ釋迦佛法の世に生れ乃ち解脫を得ずに死ぬが殘念ぢや、情願其迄一月間刑殺を延せて晩の鐘と願ふと、耆梨子危急の場合に晩の鐘なんて洒落た面白い坊主だ、一月は長過ぎるから七日待て遣うと言たので海比丘僅か七日で生延たが得と一心不亂に勤修精進し居た、遂ろ七日目に獄え送られ逃た男女が有る、全く王の宮女が戎王子と私語し居たのを王が見て大に怒り二人を人造地獄に送ると耆梨が之を鐵鉢で搗碎いたんだ、隣に餅搗く杵音は美しい唄に引よしが殺程奇麗な男女でも臼で責らるゝ處は色氣も無く海比丘

之を見て極めて人身を厭い此身糞涕の如し義に於て堵
有る無し向者矣女色今將何所在 ぞかち此人身を断念し
て二度と生出ぬ工夫をしたらう一切結を除て阿羅漢と成
こと苦と悟った所え獄主来て七日の期限が満たから迚海
比丘を引立て油鑊に入れ薪を燃すに一向燃ず
因て鑊に蓋して猛火を焼し最早落けたろうと思ふて蓋
を開くと海比丘平氣で蓮華に坐り居た王此を聞て無量
の臣家を將ね来て者ども海比丘爲王の如く虚空に昇り
種々の神通変化を示す王之を見て即座に佛法に帰依し
彼比丘は自分端世佛に少年を奉りた時佛阿難に縁言し
て佛滅後百年此國王に生れ佛法を弘通し八萬四千塔を
建べき者だと宣ふと聞き帰命して懺悔すると海比丘
空中で変化した王益信心の磨を固め人迚地獄から出る
を見て獄主者梨假令國王たり共一旦此中に入た者は出
さぬ定めぢや者梨々々歩めと引立に懸る王曰く然ならば
一番先に此獄に入たのは誰だ者梨子曰く知た事ぢ此鼻
様だ王曰く然ちば教ろ先に海が死ぬべきぢやと云て
者梨を作膠含裹に火刑にし勅して此地獄を壊て大赦を
行ふと有る者梨が自分作った人迚地獄に先入たので
自分が作った規定通り殺されのは商鞅や江藤新平が自

今作つた法律で刑せられたのと同じ事で俗に所謂ミイラ取がミイラに成る、女を取らうとして穽に入た男が其女の夫に殺され懲つた亞非利加淡と同趣向だ。

跡片付に言て置た最初二人の童子が沙弥すると怒れ佛が来るを見て阿育の前身閻耶童子が沙を奉つて一天下の繖蓋王たらしめよと発願すると同時に今一人の此閻耶童子が者後身得道して無上正覺たるを得せしめよと願ふた、果して此童子の後身が阿育と同腹の弟に生れて離憂の義で毗多輪柯と名けらるゝ、此人初め佛僧が苦行せざるを見て佛法では史り解脱を得ぬと信じ外道法を信じた、足阿育既に佛法に帰依し師依し種々勸めが聞入れず、或時離憂が狩せんとて山に入り一仙人に自身を焚り苦行を見た、年間樹の果と根の食に菜を衣とし草に臥すと對えた、其程功を積だに何故斯く熱し苦むかと尋ると吉實は鹿が行欲するを見て欲心起り欲心の火我心を焼き苦むと云ふ離憂然は社此仙人程多年苦行してすら鹿の交るを見て忽ち色情を起すを免れず、況んや佛僧は乳味を食ひ衣服を捨ず何して欲念を捨得んや、必竟兄王阿育は佛僧に誑れ居ると謂た、阿育王之を知て何卒弟を教化せ

んと思ひ大臣に勅して吉今入浴するから弟に我衣服を
著せ王位に登らしめよと云た、大臣王が脱置た裝束を離
憂に示し兄王無成たら君が王に成給故一寸試し著て見
成れとて天冠を著せ王位に登らしめた、處れ阿育王現れ
て我未だ死なぬに汝吉を擬する罪死刑に中れりとて劊
手を召す、大臣王の足を禮し寛宥を願ふに依て王然らば
吉弟に七日間王たらしめ期過て死罪に處せんと有て離
憂を王位に登らせ飲食妓樂何から何迄王の暮しを為し
めた、七日過て彌よ死刑の日が来た王離憂に此七日間面
白い目をしたかと問へば命有ての物種一日過れば一日

やり因縁物語を以て王位を弱へ中耳
縮まる命もて何を旨味何を王位美女何を好音楽も念に留
らめと答ふ王言くサア左様ぢやろ佛僧も其通りだ生死
無常を不断念頭に置くから何を見聞くも煩悩が起らぬ
彼の徒ちに苦行の外面を裝ふて内心邪想断た、鹿交さを
見て手篇と来る仙人杯とは大違ひだ、深く佛教を信じて
解脱法を学ぶ者は心蓮花の水に處て水を著さる如し我
全く汝を教化せん連奇計を用ひたのだ是でも悟らぬか
と叱つたので離憂始て首を縊で安心し佛道に入て出家
した、と云と王成が能摘課ふに阿育王は兄を殺し父す

王位を横取同然にした程の男故後日弟が復讐を恐し位を奪ふを慢れて世理に出家せしめて其後を絶たんだろ、離憂出家し功積りて阿羅漢と成たが遍地で重病を得差て後養生の為に牛乳のみ用て活居た然る處今那婆陀那国に外道大に行れ裸形神像を持む者多し、阿育王聞て大に怒り悪く之を刑し一日に十萬八千人を殺したが猶勅して裸身外道の首一つ持来る者に金銭一を賞與する事とした、時に離憂牛乳を求めて或家に入り一日住る病上り故頭髪鬚爪悪く伸び衣服弊悪光色無し、養牛女此は此度裸身外道が世を恐ぶんだろと怪び夫に勧めて之を殺

さしめた、離憂其時自分の業報更も脱處無きを知り快く刀を受たので其頭を持て牧牛人王に詣り金銭を求めた王其頭を見ると髪の中處々に瘡の跡で成居る此程病で居た弟離憂で無かと忙ぎ医者を召で尋ると弟だつたので一度は氣絶したが頓て活還り大叡して以後一切外道を殺さしめず、峰精迦泥禁に入て大迦葉法統の初祖たり、阿難は二祖商那和修が三祖で優婆毱多南那和修に紹で四祖たり、阿育王の師なり諸僧四祖た離憂何故斯く非業の死を遂たかと問と答て言く、過去世一猟師有り鹿を捕へて業とす、大林中に一泉水有り此猟師網を其

遺に施置と鹿水を飲に来て多く捕はる時に林中に一人の縁覚有り縁覚とは佛無き世に出る聖人で阿羅漢如く他人に就て學ばず自分一人で悟るが菩薩よりは卑い菩薩は馬が川渡る序でに他をも乗やる縁覚は鹿が川を渡る如く自分さえ渡れば濟むと云ふ覚悟だ真言宗の大親分土宜法龍は能楠を明治聖世第一の縁覚だと吐した是は實は能楠の無量記憶力を買被った言で予は決して縁覚じや無い元日の日刊不二に自白した通り毎度婦女の夢を見るから久米仙ぢや扨彼縁覚日々泉邊で食事し竟て澡浴し耐下に還り坐したので群鹿其香を嗅知て水邊

之来無く成た猟師活計の妨げだと怒て彼縁覚を砌殺した此猟師が離憂の前身で多く鹿を殺した罪で今生に病多く昔し縁覚を殺した報で五百世中常に他に殺され前世に沙を佛に奉る童子う俳だった縁で阿羅漢と成て う惨くも人に殺されたと祖が諸ったと有る因果は元て車はれあ物で宮武氏抔も前生に蛙の蝌が上に付て白●見ず在る所が面白いとて毎度尿を其頭に仕掛た報ひで今生に自分が毎度向不見な事を筆して入獄し又頭が早く光た且つ立て無頓著な性で晩日に拂ふ金は有ても債金取れ困るか面白いとて富守を造ふて六七度も無駄足

を厚ばせた報ひで無罪から獄裏に多日の憂目を見た人
なやとこなかたくめせん　くゆこせい　くゆん　せつけう　お
が
やと南方久来仙過去世を觀じて說教し置く（完）

い55749